

## 時代とともに 観光客が変わりました



もりた観光物産店 店主

たけし  
**森田 健** さん

青函連絡船が廃止になる昭和末から平成元年頃までは北海道全域からの中学校修学旅行客が多く、札幌を中心に何万人も来てくれました。店は毎日団体客で混み、子どもたちは「内地へ来た」という思いで、小遣いをはたいてお土産を買ってくれました。青函トンネルを列車が走り修学旅行コースが変わったあたりから、十和田湖に学生の団体客は泊まらなくなりました。現在はグループや家族、シニア夫婦が目立つようになってきました。

観光客から「十和田湖には何があるの？乙女の像？十和田神社？」と言われても、景色全体が見どころなのに、どこをどのように見ればいいのか分かりません。昔は旅行会社任せでしたが、これからは地元のパR観光ガイドが必要ですし、ここにしかない新しいアイデアをさまざま考えていかなければなりません。現在、旧参道の杉並木をチップ舗装し、当地の歴史復元に務めています。



ホテル十和田荘・  
十和田湖レークビューホテル  
代表取締役

**中村 秀行** さん

十和田湖遊覧船は以前、団体旅行コースに乗船が含まれ年間約83万人でしたが、今はオプションとなり、2015年度は約12万人でした。ホテルも青森、秋田両県で23軒ありましたが、現在は9軒です。良き時代にホテルや店舗を増設したが、今は廃業で廃屋が目立つようになり、観光地の景観が損なわれています。

観光地には、店の外にテーブルやベンチを並べてゆっくりと食事するなど、喜んでもらえるようなオシャレな店やホテルが必要です。事業主が高齢化し家族経営で難しいかもしれませんが、若い人が手を取り合って、意欲を持って経営再建していただきたいと思っています。

十和田湖は日本の宝です。しかしながら東北地方の外国人の誘客は一人負け状態。日本全体で年間約2千万人も訪日しているのに、北海道の函館が40万人で、東北は6県で52万人です。当ホテルの外国人客は台湾からが90%、ほかは中国、香港、アメリカからです。台湾客は湖や渓流、温泉好き。台湾には紅葉や雪がなく、桜も日本ほどないので5月と10月に多く来てくださいます。

母体である日本人観光客も、大勢来てくださることを願っています。

このように、十和田湖・奥入瀬渓流は、さまざまな体験活動ができる観光資源をたくさん持っています。そのため十和田湖と奥入瀬渓流は観光と体験活動により日本有数のブランド観光地となっています。

■後世につながる貴重な宝

環境省は国立公園への外国人の訪日客誘致（インバウンド）のため、ブランド観光地として世界にPRする「国立公園満喫プロジェクト」のモデル公園に、十和田八幡平（青森、秋田、岩手）など全

国8カ所を選びました。国は2020年までに外国人の国立公園訪問者数を年間430万人から一千万人に増やす計画で、この事業には専門ガイドの育成や宿泊施設の機能などの強化が盛り込まれています。

当市でも、国立公園指定80周年を機に、県や国と一緒に十和田八幡平地域の再生に取り組んでいきます。

2015年の県内の宿泊者は約500万人、このうち外国人は11万9千人で前年比の60・8%増となっています。十

和田湖・奥入瀬渓流の観光も今後外国人観光客の増が大きい期待されます。

8月30日、県は中国からの訪日観光客に本県を訪れてもらおうと、中国の旅行会社9社の担当者を招き、酸ヶ湯温泉、奥入瀬渓流などの観光地を視察しながら本県の魅力をアピールしました。

一方、湖畔には休廃業して廃屋となったホテルや土産店があり、景観を損ねています。2015年、十和田湖駅前にある廃業した南祖庵が解体されました。国は今後、解体

また、奥入瀬渓流の自然環境を保護するために、2016年度、青楓山パイパスが着工されました。延長は5・2キロ。そのうちトンネル部分が80パーセント以上を占め高度な技術を要するため、国による直轄事業となっています。

また、奥入瀬渓流の自然環境を保護するために、2016年度、青楓山パイパスが着工されました。延長は5・2キロ。そのうちトンネル部分が80パーセント以上を占め高度な技術を要するため、国による直轄事業となっています。



南祖庵跡地の南祖庵跡地。今後、景観整備が進められる。

した跡地を含めた駅前広場の景観整備を進める方針です。

また、奥入瀬渓流の自然環境を保護するために、2016年度、青楓山パイパスが着工されました。延長は5・2キロ。そのうちトンネル部分が80パーセント以上を占め高度な技術を要するため、国による直轄事業となっています。

【参考資料】財団法人自然公園財団「十和田国立公園パークガイド十和田湖（奥入瀬八幡平）」、十和田文化研究所発行「十和田国立公園」、東奥日報新聞、デリーー東北新聞、十和田湖町史

## 貴重な体験型観光を世界ブランドに



ここにしかない楽しい体験を  
私たちが未来に発信します



私も  
応援す  
るぞ！

自然の中での遊びや体験は、子どもたちの人間的成長に不可欠。十和田湖・奥入瀬渓流は自然体験の機会を大いに提供する。

■観光事業を支える  
未来の子どもたち

8月10日、11日、三本木小地区安全・安心協働活動協議会（佐藤やえ会長）は、小学生、高校生20人とともに十和田湖での自然体験を行いました。

この体験活動は、湖畔宇樽部でカヌー体験、休屋でモーターボート体験、十和田神社、乙女の像の散策で歴史の学習、奥入瀬渓流でこけの観察を行い、県内外に観光をPRする人材の育成がねらいです。

初日は湖畔宇樽部でのカナディアンカヌーを体験しました。カヌーのこぎ方をネイチャーガイドから教わった後、子どもたちは恐る恐るカヌーに乗り込み、次第に慣れると沖にこぎ出して行きました。小学6年生の高祖亨良くんは「オールの使用方をまちがえてカヌーがひっくり返りそうでしたが、楽しかった。また乗ってみたいし、多くの人が体験してほしい」とうれしそうでした。佐々木精一さん（70）は「市民の多くが十和田湖での自然体験の良さを知らないし、PR不足な気がし



第1回十和田湖マラソンもブランド企画のひとつ

ます」と話し、佐藤やえ会長（59）は「湖の中で新たな自然を発見し新鮮な気持ちになりました」と自然体験の良さを再認識していました。

■初の十和田湖マラソン

第1回十和田湖マラソン大会が7月10日、秋田県小坂町の大川袋から本市休屋を経由しノ口までの21キロのコースで開かれました。全国から487人のランナーが、沿道の景色を楽しみながら湖畔を駆け抜けました。「十和田湖にかつてのにぎわいを」と、十和田商工会議所青年部が中心となって企画したもので、北海道から長崎まで、15・78歳のランナーが参加しました。